

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	理工系研究大学における学士課程1年生入学時オリエンテーション・ガイダンスでは何をするべきか？
著者	伊東幸子, 鈴木敦子
出典	初年次教育学会第10回大会発表要旨集,
発行日	2017, 9

理工系研究大学における学士課程1年生入学時オリエンテーション・ガイダンスでは何をするべきか？

【発表者】 伊東幸子（東京工業大学学生支援センター） 鈴木敦子（東京工業大学学生支援センター）

1. はじめに

本稿では、理工系研究大学の学士課程1年生に対する入学時の学修オリエンテーション・ガイダンスとして何をするべきかを、T工科大学の学士課程1年生に対する入学時ガイダンスの事例紹介を含めて探索する。日本の初年次学生へのアプローチの実践及び研究は、教育（正課）に重きが置かれ（舘，2013），正課外オリエンテーション・ガイダンスプログラムについての研究蓄積は少ない。

本稿は、理工系大学，研究大学というカテゴリーに属する大学で，長年経験的に実施されている学士1年生オリエンテーションプログラムをより学生の成功に資するものにするための理論的・実践的な貢献を目指す。

2. 概念フレームワークの設定

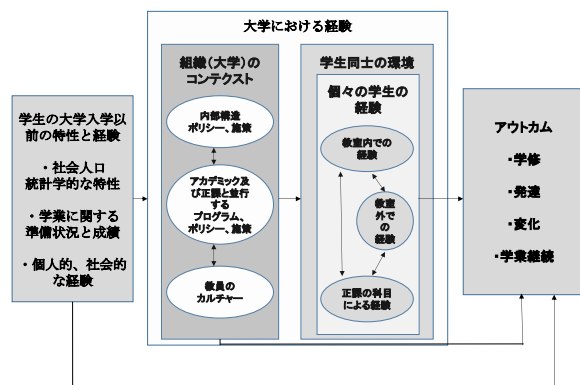


図1 学生の学びに関する包括的なモデル

（Terenzini & Reason(2005)を訳出）

本稿では、日本の理工系研究大学の学士1年生の大学での経験を理解する概念フレームワークとして、図1の学生の学びに関する包括的なモデルを援用する。

当モデルにおいて学生は、社会人口統計学

的、学業上、個人的それぞれ固有の特性と経験の幅を持って大学に入学し，これらの要素は、学生の大学へのエンゲージメント（関与）を様々な側面で形作る。さらに，学生が関与する様々な経験は，カリキュラム，教室における経験，教室外の経験のそれぞれのバリエーションによって規定される。一般的には，学生がアクティブにこれらの経験に関われば関わるほど，学士はより成長し，アウトカムが大きくなると仮定される。これらのダイナミックな動きは，大学のコンテキスト，大学の組織的な特徴・構造・実践・施策，教員や学生間の文化と環境の影響下で起こる。

3. 先行研究からの知見

この種のモデルを実証した研究の結果をいくつか紹介する。アカデミックコンピテンスというタイプの学生のアウトカムの規定要因を探索した Reason, Terenzini, & Domingo(2006)によれば，アカデミックコンピテンスの知覚に対しては，学生の個人属性，専攻などの変数と比較して，学生の個人の経験を表す変数が，もっとも説明力が高い。とくに，初年次学生時の大学のサポートについての学生自身の知覚が良い学生，つまり，初年次に大学の教職員から自分が必要とする学業上・学業以外に必要なサポートを受けられていると知覚している学生，教職員と良い関係を築けていると知覚している学生は，自身のアカデミックコンピテンスについて高いと知覚している。本稿の関心事である理工系という観点では，生命科学，工学，自然科学の専攻（major field）が5%水準でアカデ

ミックコンピテンスの知覚に有意に影響しているが、全体として専攻分野の影響は傾向が一貫しておらず、専攻分野は、学生のサポートについての知覚（1%水準で有意）ほど、アカデミックコンピテンスの知覚に明確な影響は及ぼさないと考えられる。

Gasiewski, Eagan, Garcia, Hurtado, & Chang (2012) は、米国 15 大学 73 の初歩 STEM(science, technology, engineering, and mathematics)コースに所属する 2873 名の学生のデータの階層的回帰分析により、学生のアカデミックエンゲージメントの規定要因を探索している。その結果によると、入学以前の学業成績（SAT、大学の数学の単位を高校で先取りしていたかどうか）は入学後のアカデミックエンゲージメントに有意な影響を与えない。一方で、高校時代に授業外で教員に質問した頻度は大学入学後のアカデミックエンゲージメントに 1%水準で有意な影響を与える。その他、1%水準でアカデミックエンゲージメントに有意な影響を与える項目は以下の 1)～11)である。

- 1)フレッシュマンである
- 2)いつ、だれに助けを求めればよいかを知っている
- 3)学内でチュータリング（個別指導）を求めた（回数）
- 4)学外で専門的なチューターを求めた（回数）
- 5)追加クラスに参加した（回数）
- 6)教員は学生に対して文書でフィードバックをしてくれている（この文章に合意する）
- 7)新しい概念を学ぶことにワクワクする（回数）
- 8)宿題に懸命に取り組むよう動機づけられている（この文章に合意する）
- 9)教室での時間全体のうち講義に費やされる時間の割合（マイナスの影響）
- 10)質問することを心地よいと感じられる教室の雰囲気
- 11)学び向上するために有意義なフィードバ

ックを得ている

Reason et al. (2006), Gasiewski et al. (2012)の結果を総合すると、理工系研究大学において、将来のアウトカムにつながる学生のエンゲージメントを向上させるには、入学前の成績やどの専攻にいるかということよりも、以下 1)～3)の入学後の経験が大きな影響を与えていることがわかる。

- 1)どんなときにどこに行けば助けが得られるのかを知っている。
- 2)教室で授業を受ける以外に、学内外で個別指導や追加クラスを受ける経験をする。
- 3)教職員から、自分が必要とする学業上及び学業以外のサポートを受けられている。

1)～3)の内容は、科目や学部という枠を超えて共通であり、かつ、学業だけでなく学業以外をも包含する。学生がこれらの経験を得やすくなるような内容（学内各種リソースを使い方も含めて周知する。教室で授業を受ける以外にも積極的に学ぶ機会を増やし、教職員との交流を促進するよう学生を水路付ける。）は、学生生活のできるだけ早い時期に働きかけることが有益であり、かつ、個別授業や専門の枠を超えて汎用的である。したがって入学当初の全学オリエンテーションの中で実施する内容としてふさわしいと考えられる。

4. T工業大学学修コンシェルジュによる学士課程1年生ガイダンス

T 工業大学では、大幅な教育改革の施行初年度に合わせて、修学支援を行う学修コンシェルジュ職を新設し、学生を少人数(15 人程度)のグループで集める学修コンシェルジュによる入学時修学ガイダンス（正課外）を開始した。初年度の参加率 73.8%，2 年目は 87.9%だった。前節までで検討した内容を意識しつつ、学生の声やニーズに応じてプログラムの内容・運営方法を変更するため、学生のアンケート自由記述をテキスト・マイニングの手法で分析している。発表では、2 年分の分析結果を報告する予定である。